

## 天守の祖形が出土した山城

滋賀県立大学教授 中井 均

鎌刃城かまはじょうという城の存在を知る人は滋賀県内でもそう多くはありません。城は米原市番場の背後そびに聳える標高384mの急峻な山の山頂部に構えられています。その立地は江南と江北の境界線上にあたり、当初は江北の守護京極氏の最前線基地として築かれたものと考えられます。こうした城のことを境目の城といいます。

さて、鎌刃城は地元の人でさえ知られていない山城でしたが、1998(平成10)年から2002(平成14)年の5カ年にわたる発掘調査の結果は、従来の小さな山城というイメージであった鎌刃城を大きく変えるものとなりました。その最大の発見は石垣によって築かれていたことが判明したことです。戦国時代の山城は土を切り盛りして築く土木施設なのですが、鎌刃城ではほぼ城域のすべてが石垣によって築かれていました。織田信長によって築かれた安土城よりも古い段階で石垣の城であったことは特筆されます。

実は、私はこの鎌刃城の発掘調査の担当であったのですが、石垣が検出されたときは驚きでした。さらに興味深かったのは検出した石垣がすべて人為的に埋められていたことです。これは城割しろわりを示しています。城割とは別名破城はじょうとも呼ばれる行為で、廃城となった城の石垣などを破壊してしまうことです。新たな支配者が旧の支配者の城を破壊することによって、領民に新たな時代の来たことを見せるわけです。あるいは新たに戦争が勃発したときに、敵に城を利用されないためであったとも考えられます。いずれにせよ鎌刃城は廃城に伴い城割がおこなわれた城としても注目されます。

しかし、鎌刃城の発掘調査で最も注目されるのは地下室を伴う櫓の発見です。本丸の北に延びる尾根の先端に構えられた土塁囲いの曲輪から規則正しく配置された礎石が出土したの



ですが、その隅の礎石は周囲の土塁直下に据えられており、土塁が壁面となっていたようです。そうであれば、この土塁に囲まれた部分は地下室であったと考えられます。では、城に地下室などが存在したのでしょうか。実は天守と呼ばれる重層建物の多くには地下室が存在しました。それを穴蔵と呼んでいます。安土城の天主は5重7階の構造をしているのですが、内部の7階のうちの1階は地下室のことです。

さらによく調べてみると天守に穴蔵が伴うのは古い段階の望楼型天守だけで、新しい層塔型天守にはあまり見られなくなります。もちろん城郭に地下室が造られるのは天守以外にはありません。したがって鎌刃城で検出された地下室は天守の祖形となるような櫓であった可能性が高いといえます。あるいは近江に侵攻してきた織田信長は、こうした近江の城をヒントにして安土城を築いた可能性も十分に考えられます。観音寺城の石垣とともに鎌刃城の地下室を伴う櫓の存在は近江の城郭の先進性を如実に物語っています。

戦国時代の山城の城域がすべて石垣によって築かれていることと、地下室を伴う櫓の存在などが大きく評価されて、鎌刃城跡は2005(平成17)年度に国の史跡に指定されました。

中井 均(なかい ひとし)

1955年大阪府生まれ。龍谷大学文学部史学科卒業。(財)滋賀県文化財保護協会、米原市教育委員会、長浜城歴史博物館館長を経て現職。びわこ学院大学、金沢大学非常勤講師。NPO法人城郭遺産による街づくり協議会理事長。専門は日本考古学。特に中・近世城郭の研究。